



Title	テレビニュースにおける言語現象とその要因に関する一考察
Author(s)	轟, 里香
Citation	Osaka Literary Review. 2015, 53, p. 33-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51111
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

テレビニュースにおける言語現象と その要因に関する一考察

轟 里香

1. 序論

本稿では、テレビのニュースで用いられる言語に見られる現象を考察する。

近年、日本においてニュースで使われる言語には、従来見られなかったような現象が顕著になっている。それらは、一見多様な言語現象のようだが、共通している点がある。それは、要点を後置するという点である。本稿の目的は、このような現象が始まった時期およびその背後にある要因について明らかにすることである。

テレビは我々が日常的に接するものであり、様々な面で影響が大きい。言語的にも、大きな影響を及ぼすと考えられる。特に、ニュースは、娯楽番組とは異なり、そこで使われている言語は公式の場で使われる言語とみなされる。したがって、ニュースで使われている言語について考察することは意義のあることである。

本稿のような、テレビのニュースの通時的研究には、過去のニュースがデータとして必要となる。しかし、これには大きな制約が存在する。過去に放送されたニュースで公開されているものは少なく、ニュース番組¹のデータにアクセスすることは、現在のところ非常に困難となっている。中（2008）が述べるように、テレビは基本的に検証しにくい、または検証を拒むメディアである。このことにより、ニュースの言語変化を時間を追って研究することが難しくなっている。

このように、過去のテレビニュースのデータを得られる機会は非常に少

ないが、そのような機会を研究者に与える貴重な試みとして、「NHK アーカイブス学術利用トライアル研究」がある。NHK アーカイブスは、2010年3月から、「トライアル研究」という形で過去の番組・ニュースの学術利用に向けた試行運用を行っている。本稿の議論は、2011年度 NHK アーカイブス・トライアル研究に言語学的な観点から応募し、採択された研究提案に基づいている²。

本稿の構成は、次のようなものである。まず2節で、轟（2007、2009、2013）の議論を踏まえ、近年ニュース番組において顕著に見られる現象を指摘する。3節では、それらの言語現象に共通している点を明らかにする。4節では、NHK アーカイブス学術利用トライアル研究で得られたデータに基づき、ニュースにおける言語現象の出現時期およびその背後にある要因を示す。5節では、本稿の議論のまとめを行う。

2. 近年のテレビニュースに顕著な言語現象

この節では、テレビのニュースにおいて顕著な言語現象として、4点を挙げ、具体的な例を示す³。

2.1 名詞句の多用（「体現止め」）

テレビニュースの顕著な言語現象の1点目として、名詞句の多用がある。これは、文の代わりに名詞句が用いられる現象であり、結果としていわゆる「体言止め」となる。（以下では、この現象を「体言止め」と呼ぶことにする。）

(1) 体言止め

- a. 与野党が1勝1敗の結果となった参議院の二つの補欠選挙。

（「ニュースウォッチ9」NHK、2007年4月23日放送）⁴

- b. 昨日午後3時40分ごろの無線連絡を最後に行方が分からなくなって

いたグライダー。

(「ニュース 7」NHK、2009 年 10 月 13 日放送)

c. 午後 5 時半から始まった代議士会。

(「ニュース 7」NHK、2012 年 6 月 25 日放送)

d. 吸引すると興奮作用があり、幻覚や幻聴の症状が出ることもある脱法ハーブ。

(「ニュースウォッチ 9」NHK、2012 年 6 月 12 日放送)

e. きのう会見した警察庁長官。

(「おはよう日本」NHK、2014 年 8 月 8 日放送)

(1 e) を以下の(2)と比較してみよう。

(2) 警察庁長官がきのう会見した。

(1 e) は(2)と同じ出来事を伝えるためのものだが、文ではなく、名詞句の形となっている。このような「体言止め」の現象が今日テレビニュースで顕著になっている⁵。2012 年 6 月 12 日放送の「ニュースウォッチ 9」(放送時間 60 分間)では、体言止めの出現が 43 回あった⁶。これに対し、1974 年 4 月 1 日放送の「ニュースセンター 9 時」(放送時間 40 分間)では、体言止めの出現は 1 回となっている。(ここでは、スポーツ関係のニュースでの出現回数を除いている。スポーツ関係のニュースでの出現回数については、4 節で述べる。)

2.2 要点の省略

テレビニュースにおいて顕著な言語現象の 2 点目として、文の重要な要素や文法的に必須の要素が省略されることが挙げられる。これらをまとめて本稿では「要点の省略」と呼ぶことにする。

次の(3)(4)を見てみよう。

要点の省略

- (3) a. 民主党の対案の提案に対し、与党は。

(「ニュースウォッチ9」NHK、2007年12月21日放送)

- b. 福袋の中身は。東京スカイツリー⁷。

(「ニュース7」NHK、2011年11月29日放送)

- c. 久しぶりの地元の味に消費者は。

(「ニュース7」NHK、2012年6月25日放送)

- d. 専門家は。

(「ニュース7」NHK、2013年11月17日放送)

- (4) a. 700万円払った部下もいました。

(「ニュースウォッチ9」NHK、2007年12月21日放送)

- b. ほぼ4年3ヶ月ぶりの復活です。

(「ニュース7」NHK、2010年10月5日放送)

- c. 明日採決です。

(「ニュース7」NHK、2012年6月25日放送)

- d. 原発事故から1年3ヶ月。ようやく店頭に並びました。

(「ニュース7」NHK、2012年6月25日放送)

- e. 元気に泳ぎ始めました。

(「ニュース7」NHK、2012年6月25日放送)

- f. 日本は署名しませんでした。

(「ニュースウォッチ9」NHK、2013年4月25日放送)

これらの文は、いずれも文の重要な要素や文法的に必須の要素が省略されている。

このような文のうち、(3)は、文の述部が省略されており、文法的に必須

の要素が省略されている。このような文が使われるニュースのうち、たとえば (3d) は次のような構成をとっている。

- ①「〇〇は」「専門家は」というナレーションとともにその人物が映像で登場する。
- ②画面の右上にその人物が誰かを示す字幕が出る。同時にその人物の発話を開始される。

このような例では、「専門家は『〇〇〇』と述べました。」の下線部を、映像と実際の専門家の発話で置き換えているとみなすことができる。言い換えると、「専門家は」という音声言語と、専門家のインタビュー映像・音声とを合体させて、「専門家は『〇〇〇』と述べました。」という文と同じ働きをさせようとしていることになる。(轟 (2013))

文法的に必須の要素が省略されている(3)に対し、(4)は、省略があるものの、コンテキストがあれば通常出現し得る文も中にはある。

(5) (cf. (4e))⁸

初めて海を見た子供たちは大喜びしました。そして、元気に泳ぎ始めました。

(5)の第二文の主語は、コンテキストから明らかなので、このような場合は省略されても自然である。しかし、(4)の文はいずれも、そのニュース項目の冒頭に生じた文である。したがって、コンテキストから見てもこれらの文では必須の要素が省略されていることになる。

(4)のような、ニュース項目の冒頭で行われる要点の省略は、文学作品でとられる手法と類似している (轟 (2013))。例えば、小説に関して述べられた次の文を見てみよう。

藤沢周平の小説は、最初の一文を読むと、次を読まずにいられない。

(中略)「誰かに見られている、と思った」と始まる「おつぎ」のよ
うに、そう認識する主体を出さない入り方も読者を引き込む。「とっ
さに背を向けたが間にあわなかった」という「晩夏の光」の冒頭文は
さらに極端で、情報の空白を追って読者は身を乗り出す。

(中村 (2014)、下線は筆者)

ここでは、小説における冒頭文の効果について述べられている。「読者を引き込む」冒頭文の例がいくつか挙げられているが、その中でも、「情報の空白」を含む冒頭文は、「さらに極端」な例として挙げられている。この「情報の空白」が、その後の話の展開によって解明されていくことになるわけである。小説の場合、(架空の)できごとについて単に伝えるのが目的ではなく、読者に様々な感情を引き起こすためにいろいろな技法がとられるが、上のような構造もその一つである。

これに対し、ニュースは本来、(現実の)できごとのいわゆる 5W1H を伝えるのが第一の目的であり、小説とは異なるはずである⁹。しかし、(4)のような文には重要な要素の省略すなわち「情報の空白」がある。小説とは違い、テレビニュースは、音声や映像など様々な記号で成り立っているので、音声言語上省略された要素が、他の何らかの形で示されている場合も確かにある。例えば、(4c)では、音声言語では「何が」採決されるのかが省略されているが、音声と同時に画面で「消費増税法案」の文字が出ており、「何が」に当たる情報が文字の形で補われている。これに対し、要点が完全に省略され、どのような形でも情報が全く補われていない場合もある。(4f)では、「日本は署名しませんでした。」という音声と同時に画面に大きく文字が出ているが、これは音声言語とはほぼ同じ「日本は署名せず」という文字であり、いつ何に署名しなかったのかという情報は完全に省略されている¹⁰。このような場合、省略された情報は、その後のニュー

スの展開によって明らかにされていくことになる。このような構造、すなわち、省略を含む冒頭文が置かれ、その後の展開でそれが解明されていくという構造は、上に述べた小説の構造と類似している。つまり、「情報の空白」を含む小説の冒頭文と類似した文が、ニュース項目の冒頭で用いられているということになる。

2.3 疑問形式の文の使用

テレビのニュースにおいて顕著な言語現象の3点目として、疑問形式の文の使用が挙げられる。

(6) 疑問形式の文

- a. 株価の下落に歯止めがかからないのはなぜなのでしょう。

(「ニュース7」NHK、2008年10月6日放送)

- b. なぜ15人もの人が犠牲になったのか。

(「ニュース7」NHK、2008年10月6日放送)

- c. あすはどうでしょうか。

(「ニュース7」NHK、2008年10月6日放送)

- d. 法案に反対した場合、執行部はどう臨むのか。

(「ニュース7」NHK、2012年6月25日放送)

- e. その人気メニューがなぜ禁止となったのか。

(「ニュースウォッチ9」NHK、2012年6月12日放送)

- f. 野田総理大臣、難しい連立方程式の解を見つけ出すことができるのでしょうか。

(「ニュースウォッチ9」NHK、2012年6月12日放送)

このような疑問形の文は、音声言語においてだけではなく、画面上の文字にも疑問文（あるいはその省略形）が目立つ。

(7) 文字で出現する疑問形式の文

a. 反対なら離党？

(「ニュース 7」NHK、2012 年 6 月 25 日放送)

b. 執行部の処分は？

(「ニュース 7」NHK、2012 年 6 月 25 日放送)

一般的に言って、疑問形式の文にはそれに対する答えの存在が考えられるが、(6)のような疑問形式の文に対し答えが与えられているかどうかに関して、ニュースを二分することができる。多くの場合、疑問文に答える形でその後の話が進められていく。そのような場合、疑問形式の文は、その後のニュースの展開を導く働きをしている。一方、(6f)のように、そのニュース中では答えが与えられない疑問文もある。そのような場合には、疑問文はそのニュース項目の終わりのほうに置かれ、疑問を投げかけたままその項目が終わる。このような疑問文は、ニュースの展開を導く働きではなく、他の役割をもつと考えられる¹¹。

2.4 分裂文

テレビのニュースにおいて顕著な言語現象の 4 点目として、分裂文の出現が挙げられる。分裂文（学校文法等で強調構文と呼ばれる構文）は、(8)のようなものである。

(8) a. 太郎が最近興味を持っているのは、パソコン通信だ。b. It was perfume that Mary bought in France.

(高見 1999: 146)

高見 (1999) によれば、これらの文では、下線部の位置が焦点要素、すなわち話し手が最も伝えたい部分で、通例文強勢（アクセント）が置かれ

る。高見が述べるように、分裂文は焦点が文のどの要素であるかを示すことができる構文である。つまり、分裂文を用いる話し手は、文のいずれかの要素を強調する目的でこの構文を使うということになる。この構文が一般的に「強調構文」と呼ばれていることも、それを示している¹²。

このような分裂文が、近年ニュースにおいてしばしば出現している。(轟(2009))

(9) 分裂文の出現

- a. 4081 チームの頂点に立ったのは、佐賀北高校でした。

(「おはよう日本」NHK、2007年8月23日放送)

- b. 第31回オリンピックの開催地に決まったのは、リオデジャネイロでした。

(「おはよう日本」NHK、2009年10月3日放送)

- c. この決定で大きな打撃を受けるのが、肉を扱う業界団体。

(「ニュースウォッチ9」NHK、2012年6月12日放送)

- d. 逮捕の決め手になったのは、防犯カメラなどの画像です。

(「ニュース7」NHK、2012年12月1日放送)

(9 a-d) はそれぞれ下線部を強調する分裂文の形を取っている。

分裂文の出現回数を具体的にみると、2012年6月12日放送の「ニュースウォッチ9」(放送時間60分間)では、分裂文の出現は11回であった。(ここでも、スポーツ関係のニュースでの出現回数を除いている。)これに対し、1974年4月1日放送の「ニュースセンター9時」(放送時間40分間)では、分裂文の出現は0回となっている。

3. テレビニュースに顕著な言語現象の共通点

2節で見たように、近年のテレビニュースに顕著な言語現象として体言

止めの多用、要点の省略、疑問文の使用、分裂文の出現が挙げられる。これらは、一見様々な言語現象のようだが、共通している点がある。それは、要点を後置するという点である。各言語現象についてこの点を確認しよう。

まず、要点の省略、および疑問文に関してみると、要点の省略は、文字通り要点を省き、後で述べることになるので、要点の後置である。また、疑問文を使用すると、その答えの形で要点を後から述べることになる。

次に、体言止めと分裂文についてみてみよう。先に述べたように、本稿で体言止めと呼んでいる例には、名詞に修飾語句がつくタイプのものがある。このタイプは、名詞に修飾語句がついて名詞句をなし、これが文の代わりに用いられている。このことにより、重要な情報を担う要素が後ろに置かれることになる。これには、日本語の言語的特性が関係している。句の中心となる語（主要部）の位置に関し、日本語は「主要部末端言語」と言われるように主要部が句の末端にくる言語である。したがって、修飾語句を伴う名詞句を用いると、日本語では、主要部の名詞が最後にくることになる。比較のために、日本語の名詞句の例と英語の名詞句の例を(10)で挙げる。句の主要部が日本語では句の後ろにくるのに対し、英語では句の前にくる。

(10) (下線部が名詞句の主要部)

- a. ステージで歌っている少女
- b. the girl singing on the stage

このように、日本語では言語的な特性上、修飾語句を伴った名詞句を用いることによって、主要部である名詞が最後に来ることになる。文を用いる場合でも文の主要部（屈折要素）が後ろに来るが、名詞は語彙的要素であり担う情報量も多いと考えられる。したがって、名詞句の主要部である名

詞は要点である場合が多く、そのような場合に文の代わりに名詞句を用い
れば要点が後ろに来ることになる¹³。

次に、分裂文を見てみよう。要点の位置という観点から(8)を見ると、同
じ「分裂文」と呼ばれる構文でも、日本語と英語では焦点要素（強調した
い部分）の現れる位置が異なることが分かる。英語では比較的前のほうに
焦点要素が置かれるのに対し、日本語の分裂文では、焦点要素が文の最後
に近い位置におかれる。分裂文の焦点要素は、話し手が最も伝えたい部
分であるから、文の要点であると言える。したがって、分裂文に関しても、
日本語は英語と異なり、要点を後置することになる。

このように、体言止め（修飾語句を伴う名詞句タイプ）や分裂文を観察
すると、日本語は英語と違い、要点が後ろに行くような構造を元来持って
いることがわかる。近年のニュースでは、このような日本語の元来の構造
を多く使うことによって要点をできるだけ後ろに動かそうとする傾向があ
ると言える。

従来、新聞記事など報道に関わる言語においては、要点を最初にもって
こななければならないといわれてきた。例えば、日本語の新聞記事を英語に
翻訳する際の注意点について論じている根岸（1999）は、最も重要な要素
をアタマに置かなければならない（すなわち重点先行）と述べている。テ
レビニュースにおいても、従来はこの点を重視していたため、要点を後置
する日本語特有の構造を多用することはなかった。これに対し、近年は、
何らかの要因により、要点を後置する構造を多用するようになっていて
考えられる。次節で、この要因について考察する。

4. ニュースに特徴的な言語現象の出現時期とその要因

前節では、近年のニュースにおいて顕著な言語現象が、要点を後置する
という点で共通していることを示した。この節では、このような言語現象
が歴史的に見ていつごろ出現したのか、およびその背後にある要因を考察

する。

4.1 NHK アーカイブス・トライアル研究によるデータ収集

先に述べたように、本稿の基になった主なデータは、2011 年度 NHK アーカイブス・トライアル研究によるものである。ここで、NHK アーカイブス・トライアル研究について、およびそのデータ収集過程について述べておく。ここでこれを述べる目的は、NHK アーカイブスのような映像アーカイブが言語研究に重要であること、および残された制約について示すことである。

NHK アーカイブスとは、テレビ放送開始以来の膨大な番組を、文化資産として保存・活用していくための施設である。(NHK アーカイブスホームページによる。) NHK アーカイブスに保存されている映像資料の中には、全国の「番組公開ライブラリー」で公開されているものもあるが、一部である。また、過去に放送されたニュースの公開はほとんどない。

そのような中、「NHK アーカイブス学術利用トライアル研究」が開始された。これは、審査を通過した研究提案に対し、一定期間決められた場所で、アーカイブスのコンテンツの閲覧を認めるものである。第1期閲覧は、2010 年 3 月、埼玉県川口市で開始された。その後、2011 年 4 月、関西トライアル閲覧が NHK 大阪放送局で開始された。

本稿の基となっている研究課題は、2011 年度 NHK アーカイブス・トライアル研究の関西トライアルに採択されたものである。

次に、データ収集の過程について述べる。まず、閲覧の期間は1年ないし半年で、その期間内の一定の日数閲覧できる。閲覧の前に、コンテンツの閲覧申請をし許可を受ける。コンテンツ本体は川口の NHK アーカイブスに保管されているため、関西トライアルの場合、閲覧期間前に閲覧申請し許可された番組だけが DVD 化されて大阪放送局に送られ閲覧室に用意される。このため、閲覧コンテンツ数に制限がある。本研究は関西での閲

覧によりデータを収集したので、閲覧数の制限があった。

NHK アーカイブスに保存されているニュース番組の音声の記録には、1995 年以降と 1994 年以前で大きな違いがある。1995 年以降は、すべてが放送時のまま録画されて保存されている。これに対し、1994 年以前のニュースは、基本的に映像のみ（アナウンサーの声なし）の保存となっている。したがって、ニュースでアナウンサー等の用いる言語を研究対象とする場合、1994 年以前のデータは限られてくることになる。

以上のような状況を踏まえ、本研究では、1995 年から 2007 年まで年ごとに 1 日または 2 日を選んでその日に放送されたニュース番組を選んだ。具体的なニュース番組名は「おはよう日本」「ニュース 7」および午後 9 時台以降の時間帯のニュースの 3 つである¹⁴。毎年同じ日付の番組を選んで比較することが望ましかったが、以下に述べるような問題があって、同じ日付を選べない年があった。そのような場合は、できる限り近い日付の番組を選ぶようにした。1994 年以前に関しては、「ニュースセンター 9 時」というニュース番組の中で放送当時のものが放送時間分ほぼ保存されているものが少しだけあったので、それらを閲覧することにした

しかし、申請してもその番組が閲覧できない場合もあった。ニュースの場合、人権などの問題があって閲覧できないニュース項目が一つでも含まれていると、そのニュース番組全体が閲覧できない。そのような項目が年々増えていて、閲覧できる番組がなかなか見つからない年があった¹⁵。

4.2 各言語現象の出現時期

上に述べたように、本稿のデータを得るに際しては様々な制約があった。この点を踏まえた上で、本節では、トライアル研究で得られたデータを各言語現象ごとに見、それらの出現時期を示し、その背後にある要因を考察する¹⁶。

4.2.1 体言止め

今回のトライアル研究で入手した最も古いデータ（1974年放送の「ニュースセンター9時」）に、すでに体言止めが出現しているが、その大部分がスポーツのニュースに現れている。この番組でスポーツのニュースに現れている体言止めは計5回であり、その中には、次のように、名詞に修飾語句がつくタイプが含まれている。

- (11) a. 叫んだり、踊ったり、そして涙するアルプススタンド。
 b. グラウンドとスタンドが一体となり、ぴったり結びつきますこの
 高校野球。

（「ニュースセンター9時」NHK、1974年4月1日放送）

2節で述べたように、この番組では、スポーツのニュース以外で体言止めが1回出現している。しかし、これは名詞に修飾語句がつくタイプではない。

- (12) エアバス、いわゆる超大型機エアバスが、今日から国内幹線に初登場、
 わが国もいよいよ空の大量輸送時代に突入しました。

（「ニュースセンター9時」NHK、1974年4月1日放送）

注13に述べたように、このタイプは、主に語調の効果を目的に使用されると考えられる。したがって、スポーツニュースに現れている、名詞に修飾語句がつくタイプのように要点を後ろに回すことになるタイプの体言止めとは異なる。

このように、NHK アーカイブスで確認できる最も古いニュース番組でも、スポーツニュースに体言止め（名詞に修飾語句がつくタイプ）が確認できることから、この言語現象はスポーツニュースから始まったと推測で

きる。近年でも、2節で述べた「ニュースウォッチ9」（2012年6月12日放送）において、スポーツニュースでの体言止めの出現回数は35回であり、他のニュース項目での出現回数（合計43回）に比べて際立っている。

4.2.2 要点の省略

今回入手したデータで、要点の省略としてはっきりと現れた最初の例は次のようなものである。

- (13) 無三振記録、途絶えました。

（「ニュース11」NHK、1997年6月25日放送）

これは、プロ野球のニュースの冒頭に出現したものである。したがって、要点の省略もスポーツのニュースから始まった可能性がある。

4.2.3 疑問形式の文

- (14)はスポーツニュースに現れた疑問形式の文の例である。

- (14) テニスの4大トーナメントの中でも最も長い伝統を誇るウィンブルドン選手権がまもなく開幕します。そのウィンブルドン。今年から試合で使うボールを変えます。サービスエースよりもっとラリーが見たいというファンの声にこたえたもので、これまでのボールより弾まないのが特徴です。試合展開も変わるのでしょうか。

（「ニュース7」NHK、1995年6月26日放送）

疑問形式の文の出現数は、2006年開始の「ニュースウォッチ9」で特に目立つようになっている。

4.2.4 分裂文

分裂文も、かなり古くから出現例が見られる。

- (15) 注目されるのは、全仏オープンベスト4入りで第6シードにランクされた世界ランキング6位の伊達公子選手です。

(「ニュース7」NHK、1995年6月26日放送)

しかし、分裂文の出現数は、今回のトライアル研究で収集したデータ(2007年までのニュース)の中では散発的であった。2節で述べたように、2012年では番組によっては二桁の出現数があることから、2008年度以降に増加したものと見られ、本稿で扱った4つの言語現象の中では最も新しく増加した言語現象であると言える。

4.3 考察

今回のトライアル研究のデータにより得られた知見を、次のようにまとめることができる。

3節で述べたように、近年のテレビニュースに顕著な言語現象である体言止めの多用、要点の省略、疑問文の使用、分裂文の出現は、要点を後置するという点で共通している。これは、重要な情報をクイズの解答のように後に回す情報提供の仕方であるといえる¹⁷。疑問文の使用は、まさにクイズと同じであるが、その他の言語現象も重要な情報をクイズの解答のように後に回すという点で、クイズに類似した情報提供の仕方を取っているといえる。先に挙げた例を、クイズのような形式に書き表すことができる。

- (16) (体言止め)

昨日午後3時40ごろの無線連絡を最後に行方が分からなくなっていた…(さて何でしょう?)

(答) グライダー

(17) (要点の省略)

ほぼ4年3ヶ月ぶりの復活です。(さて何がでしょう?)

(答) 事実上の0金利政策

(18) (分裂文)

第31回オリンピックの開催地に決まったのは…(さてどこでしょう?)

(答) リオデジャネイロ

このように、近年のニュースにおいて顕著な言語現象は、重要な情報をクイズの解答のように後に回す情報提供の方法であると言える。クイズに似た情報提供の仕方が取られているということは、すなわち、娯楽番組的な手法がニュースに取り入れられているということになる。

このことを、過去のニュースのデータと次のように関連付けることができる。本稿で扱っている4種類の言語現象はいずれも、今回のデータではスポーツ関連のニュースに最初に出現している。このことから、これらの言語現象の多くはスポーツのニュースから始まったと考えられる。

一方、ニュース番組によってもこれらの言語現象の出現に違いがある。これらの現象は、午後9時台以降の時間帯のニュースにおいて顕著である年が多かった。今回得られたデータで最も古いニュース番組は1974年の「ニュースセンター9時」であり、これを含め、1994年以前のニュース番組のデータは「ニュースセンター9時」だけ、すなわち午後9時台以降の時間帯のニュースだけで、比較対象がないが、体言止めはこの段階ですでに出現している。1995年以降は、「おはよう日本」と「ニュース7」は2014年現在に至るまで放送されている。一方、夜9時台以降のニュース番組は変遷している。1995年以降に関してみると、本稿で扱っている言語現象は午後9時台以降の時間帯のニュースにおいて顕著になっている。

2014 年現在午後 9 時から放送されている「ニュースウオッチ 9」は、2006 年に放送が開始されたものだが、すべての言語現象において際立った出現数を示している。

まとめると、本稿で扱っている言語現象が特徴的なニュースは、①スポーツニュース、②午後 9 時台以降のニュースであると言える。

これらのニュースには共通点がある。スポーツのニュースは、ニュース全体の中で娯楽的な要素を含むジャンルであると見なせる。一方、午後 9 時台以降は、時間的に娯楽番組が多い時間帯である。この時間帯のニュースから、ニュースの娯楽化が進んだと考えられる。「ニュースセンター 9 時」も当時として、画期的なニュース番組として登場したものである。加藤（2012: 102）はこの番組について次のように述べている。「夜 9 時から 40 分間の、当時としては大型の報道番組として、娯楽中心だったゴールデンタイムに割って入る大胆な構成であった。」この時間帯のニュースから始まり、他の時間帯のニュース番組にも娯楽化が広がった。このことが、言語現象を通して読み取れる。

すなわち、これらの言語現象はいずれも、ニュース全体が娯楽的に脚色されるという傾向と関連したものとして捉えられることになる¹⁸。

5. 結論

本稿は、テレビのニュースで用いられる言語において顕著になっている言語現象を、「NHK アーカイブス学術利用トライアル研究」で得られたデータを基に考察した。ニュースで使われる言語には、体言止めの多用、要点の省略、疑問文の使用、分裂文の出現が顕著になっている。これらには、要点を後置するという共通点がある。すなわち、重要な情報をクイズの解答のように後に回すという情報提供の仕方である。これらは、ニュース番組の娯楽化が進むとともに増加していった。ニュースの中で娯楽的な要素が比較的高いスポーツニュースから始まり、時間帯では、娯楽番組の

多い午後9時台以降のニュースにおいてまず顕著になった。そして、ニュース番組の娯楽化が進むとともにニュース番組全体に拡大していった。

本稿は、このような点を明らかにするとともに、テレビのニュースの通時的研究に「NHK アーカイブス」のような映像アーカイブが極めて重要な役割を果たすことを示した。

本稿で扱ったニュース番組の娯楽化という傾向は今後も強まる可能性が高い。それとともにニュース番組で用いられる言語もますます変化していく可能性がある¹⁹。今後のさらに精緻な研究のために、映像アーカイブが研究者によって積極的に活用できるような環境が整えられることが望まれる。

注

- ¹ 本稿のデータはNHKで放送されたニュースから収集したものである。NHKの分類では、放送するプログラム全体を、「ニュース」とそれ以外のプログラムに二分し、「ニュース」以外のプログラムを「番組」としている。このため、公式には「ニュース番組」という表現はないことになる。しかし、「ニュース番組」という表現は一般的に用いられているので、本稿では、「番組」という語を「テレビで放送されるプログラム」という一般的な意味で用い、ニュースを扱っているプログラムを「ニュース番組」と呼ぶことにする。
- ² 本稿の元になったデータの多くを収集するに際し、NHK アーカイブス関係者の方々に大変お世話になりました。感謝いたします。
- ³ 以下で挙げる言語例は、音声言語を筆者が聴きとって文字にしたものであり、漢字の使用や仮名遣い、読点・句点などは筆者の判断による。ただ、放送されたニュースの映像上に文字が出ることがあれば、それらの漢字の使用や仮名遣い、読点・句点などを参考にした。
- ⁴ 本稿で挙げるニュースの言語例は、NHK アーカイブス・トライアル研究によって得られたデータ、および筆者が録画したものから取った。後述するように、NHK アーカイブス・トライアル研究によるデータは2007年度までで、それより新しいものは筆者が録画したものである。2007年度のデータには、両方が含まれている。
- ⁵ (i)のような文の下線部では、助詞が省略されていると考えられる。
(i) 民主党の興石参議院議員会長、昨夜NHKのニュース番組で、「小沢代表一人

が延長反対と言っているのではない、(筆者による中略)」と述べ、党内で異論があっても延長反対でまとめたという考えを示しました。

(「おはよう日本」NHK、2007年8月23日放送)

このようなタイプの文も近年のニュースで多く見られる。(轟 2007) 発話において間(ま)がおかれる直前が名詞で終わっているという点では、(i)の下線部も体現止めと類似している。よって、本稿では、(i)のような例も「体現止め」と呼ぶことにする。ただし、文の代わりに名詞句が用いられている(1a-e)のような例を主に議論の対象とする。なお、本稿では、(1a-e)のような例では間(ま)の前に句点を入れてある。(i)のような、助詞などが省略されていると見なせる例では、間(ま)の前に読点を入れてある。

- 6 同じニュース番組中でも様々な発話のスタイルがあるが、本稿で言及する言語現象の出現数は、主にアナウンサーやキャスターが一人で語る形式のものに出現した数であり、複数の出演者が話し合う形式のものは対象からはずしてある(注19参照)。また、記者による現地からの報告、中継、気象情報(天気予報)、地震の速報、選挙の速報、為替の情報も対象からはずしてある。
- 7 (3b)の前半部と後半部の関係は、このニュース項目全体を見ないと分からないようになっている。福袋の中に東京スカイツリーやその模型が入っているわけではない。
- 8 (5)は(4e)が出現したニュース項目の内容を表すものではない。
- 9 小泉(1998)によれば、アメリカCBSのニュース・スタンダードでは、報道は事実を扱うものであり、フィクションやドラマを扱う娯楽番組とは明確に区別すべきものとされている。
- 10 音声言語に省略がある場合、省略された情報をその他の記号でどのように補足しているか(あるいは補足していないか)に関する議論については、轟(2013)を参照されたい。
- 11 ニュースにおける疑問文に対し答えが与えられている割合、および答えが与えられない疑問文の役割に関しては、別稿にて論じる予定である。
- 12 分裂文には、照応焦点型分裂文(unstressed-anaphoric-focus cleft)というタイプもある。(原口・中村 1992) このタイプでは、分裂文で通常焦点要素がくる位置に照応形(代名詞)を取り、強勢は弱い。本稿では、焦点要素に強勢が来るタイプの分裂文を主に議論の対象としている。
- 13 体言止めのうち、助詞などの省略によって結果的に間(ま)の前が名詞になるタイプは、主に語調の効果を目的に使用されていると考えられる。注5参照。
- 14 「おはよう日本」「ニュース7」は1995年より前から2014年現在まで継続して放送されており、NHKの代表的なニュース番組であると考えてよい。午後9時以降の時間帯のニュース番組は移り変わっており、2014年現在は「ニュースウォッチ9」が放送されている。

- 15 小林 (2009: 4) によれば、放送後の番組を二次利用に供するためには、複雑な権利処理が必要となり、放送事業者側から「障壁」として提起されてきた。本研究が面した問題も、その一例と言える。
- 16 紙幅の関係で、年ごとの具体的な変化を数値の形で示すことは別稿にて行う予定である。
- 17 轟 (2012) はこれを、「クイズ型情報提供」と呼んでいる。
- 18 林 (2002) は、ニュースの娯楽化に関連して、マスメディア／ジャーナリズムの「タブロイダイゼーション」について論じている。「タブロイダイゼーション」とは、新聞記事や放送番組において、その内容が娯楽化へ急激にシフトしてきたことや、記事やナレーション部分が極端に圧縮されてきた現象を指す (林 2002: 38)。林はこれを、1980 年代以降目立ってきた現象であるとしている。
- 19 本稿で扱った言語現象の他に、ニュース番組で顕著な現象として、キャスター同士の会話が挙げられる。(村松 (2005))

参考文献

- 原口庄輔、中村捷編 (1992) 『チョムスキー理論事典』研究社。
- 林香里 (2002) 『マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心』新曜社。
- 加藤昌男 (2012) 『テレビの日本語』岩波書店。
- 小林直毅 (2009) 「メディア／アーカイブ研究の展開へ向けて」日本マス・コミュニケーション学会編『マス・コミュニケーション研究』75、学文社、3-14。
- 小泉哲郎 (1998) 『テレビジャーナリズムの作法——米英のニュース基準を読む』花伝社。
- 村松賢一 (2005) 「ニュース番組における『おしゃべり』」三宅和子、岡本能里子、佐藤彰編『メディアとことば2』ひつじ書房。
- 中 正樹 (2008) 「内容分析のすすめ——実証することの大切さ」小玉美意子編『テレビニュースの解剖学——映像時代のメディア・リテラシー』新曜社、26-37。
- 中村明 (2014) 「ことばの食感——藤沢周平、空白の妙」朝日新聞 2014 年 7 月 19 日 be 3 面。
- 根岸裕一 (1999) 『新聞記事翻訳の現場から 和英翻訳ハンドブック』大修館書店。
- 高見健一 (1999) 「統語論 機能主義」西光義弘編『日英語対照による英語学概論』くろしお出版。
- 轟 里香 (2007) 「映像メディアで使用される言語の変化——英語学習者に対する影響」『北陸大学紀要』第 31 号、125-135。
- 轟 里香 (2008) 「ニュース番組で用いられる言語の変化について」『北陸大学紀要』第 32 号、121-133。

- 轟 里香 (2009) 「日英語における強調表現」『北陸大学紀要』第 33 号、101-108。
- 轟 里香 (2012) 「テレビのニュースにおける言語変化に関する一考察——映像アーカイブを用いて」第 85 回日本社会学会大会報告、2012 年 11 月 4 日於札幌学院大学（『第 85 回日本社会学会大会報告要旨集』）。
- 轟 里香 (2013) 「ニュースにおける省略と後置」『北陸大学紀要』第 37 号、169-181。